040

TAISHUKAN News

September 2021
No.3

体育・保健体育ニュース

機関誌

大修館書店

この機関誌は，「教科書発行者行動規範」（教科書協会）に則って適切に配布しています。

NEWS FILE

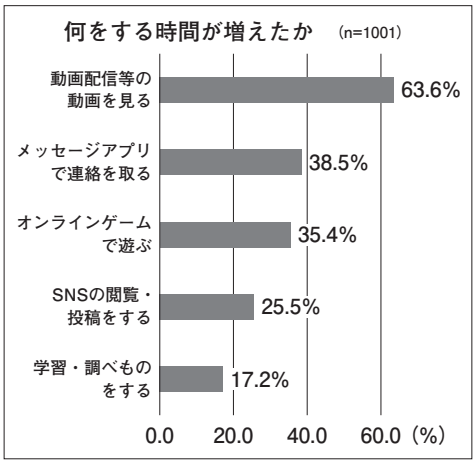
コロナ禍における青少年のインターネット利用

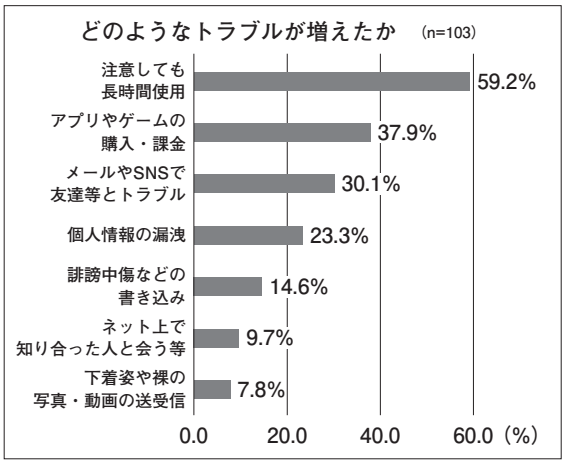
新型コロナウイルス感染症の影響で，小・中・高校生の保護者の半数以上が，こどものインターネットの「利用する時間が増えた」と回答していることが，東京都の調査結果からわかった。「トラブルが増えた」という回答もあった。

調査は2021年２月24日～３月１日，都内在住のこどもの保護者2000人を対象に実施。増加した利用時間の内容として，「動画配信・動画共有サービスで動画を見る」との回答が最も多く，「オンラインゲームで遊ぶ」との回答も多かった。

増加したトラブルの内容として，「アプリやゲームの購入・課金」「ネット上で知り合った人と会う約束をしたり，実際に会う等していた」「下着姿や裸の写真・動画を撮ったり送ったりしていた」との回答が見られた。

2019年に WHO でゲーム障害が疾病と認定された。また近年，ネットを通して犯罪に巻き込まれる事件も増えてきている。オンラインゲームで遊ぶ際の家庭内のルール作りや，ネットワーク利用犯罪の危険を回避するための教育が重要になっている。





（東京都「家庭における青少年のスマートフォン等の利用等に関する調査」2021年）

CONTENTS

長期にわたる新型コロナの流行がこどもたちの心身へ及ぼしている影響
……半谷（はんがい）まゆみ（国立成育医療研究センター　コロナ×こども本部）2

〈特別インタビュー〉「障がいがあっても自由に走れる社会を」
義足エンジニア・遠藤 謙さん ……岡 邦行（ルポライター）5

回覧								

長期にわたる新型コロナの流行がこどもたちの心身へ及ぼしている影響

半谷（はんがい）まゆみ
（国立成育医療研究センター　コロナ×こども本部）

新型コロナウイルス感染症（以下コロナ）流行下において，感染症そのものによるこどもたちへの健康影響はそれほど大きくないと考えられています。しかし，2020年春の突然の休校・休園に始まった一連の生活環境の変化は，こどもたちの心身の健康に少なからず影響を及ぼしていることが明らかになってきています。

国立成育医療研究センター「コロナ×こども本部」では，全国のこどもと保護者を対象にオンライン調査「コロナ×こどもアンケート」を実施することで，こどもたちの生活や健康に関する情報を集めています。2020年４月から2021年３月までに計５回の調査を実施し，のべ３万人超にご参加いただきました。コロナによって変化した日常，ストレス反応の高まりやストレス対処方法，こどもたちのニーズなどについて，アンケートを通してみえてきたことを中心にご紹介します。

１　こどもたちの生活習慣への影響

2020年春，多くの学校が臨時休校となりました。この時期，半数以上のこどもたちが毎日ほとんど外出しない生活を送っており，体を動かして遊ぶ時間が減ったこどもは，全体の７割以上を占めていました。

一方で，４人中３人は，スクリーンタイム（勉強以外でテレビ，スマホ，ゲームなどを見る時間）が増加していました。１日２時間以上と回答したこどもは７割以上にのぼり，１日８時間以上と回答したこどもも少なくありませんでした。この影響は，同年秋時点でも残っており，スクリーンタイムがコロナ流行前よりも長くなったこどもは４割以上を占めていました。学校が再開され日常が取り戻されつつあるとはいえ，以前のようには外出しづらい状況であることも関係しているのでしょうか。感染対策で直接のコミュニケーションがとりづらい状況下において，SNS などでの友人らとのコミュニケーションは必要な側面も大きいと思います。とはいえ，一度身に付いた習慣を直すのは簡単ではありません。運動時間の減少や，視力への影響なども心配です。使用する時間や内容などについて家庭内でルールを作ることを促すなどの工夫が求められます。

就寝時刻にも変化がみられています。小学校高学年以上のこどもの３人に１人が，コロナ流行前と比べて今の方が，就寝時刻が遅くなったり不規則になったりしていることが分かりました。「朝，ちゃんと目が覚めるのに時間がかかる」は４割，「週末は平日よりも２時間以上長く寝ている」は３割のこどもが該当しました。休校が解除されても，一度乱れた生活リズムをなかなか是正できず，慢性的な寝不足を抱えているこどもが少なくないようです。

また，小学生以上のこどもの４人に１人は，コロナ流行前より今の方が，間食の機会や量が増えていることもわかりました。私たちのデータではありませんが，コロナ下で運動不足・間食の増加による肥満，あるいはそれを極端に恐れての思春期のやせが増えているという話も聞きます。

引き続き学校と家庭で情報を共有し，規則正しい生活習慣を促していただければと思います。

２　こどもたちのストレス反応

アンケートでは，コロナに関連したストレス反応について繰り返し尋ねています。これまでに実施した５回の調査ではいずれも，回答してくれたこどもたちの７割以上に何らかのストレス反応がみられています。特に直近の第５回調査ではその割合が高くなっていました。

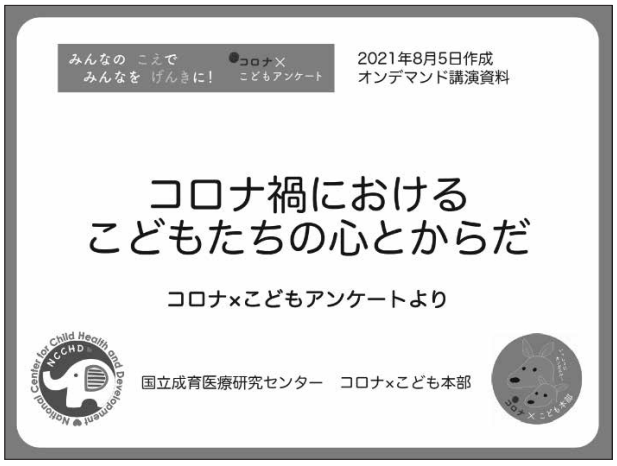
最も多くみられたのは「コロナのことを考えると嫌な気持ちになる」で，小学生では半数近くのこどもが該当しています。小学校低学年では「コロナのことは考えないようにしている」，高学年・中高生では「すぐにイライラする」「最近，集中できない」と訴えるこどもが多くなっています。「なかなか寝つけなかったり，夜中に何度も目が覚めたりする」という睡眠の問題は，どの学年でも２～３割にみら

れています。「自分のからだを傷つけることがある」と回答したこどもは，小学生では１割強，高校生では３割近くみられ，強いストレス反応がでていると考えられます。中等度以上のうつ症状が疑われるこどもの割合も，小学校高学年で15%，中学生で24%，高校生で30% と高くなっていました。

このように多くのこどもたちがコロナに関連したストレスを抱えていますが，みんなが SOS を言葉で訴えられるわけではありません。むしろ，困っているこどもほど言葉で SOS を出すのが難しいかもしれません。親や先生を心配させたくなかったり，言葉にしづらかったりするからです。周囲のおとなには，言葉にならないこどもたちの SOS に気付き，それをケアすることが求められます。

特に重要なポイントは，こどもが自分の気持ちを話せるように工夫すること，話してくれた気持ちを否定しないことです。話しかけてもらえる「隙」を作っておくこと，話を聴くときはプライバシーの保たれた静かな場所を用意すること，しんどくなる前に相談していいということを伝えること，おとなも一人で抱えないようにすること，なども大切です。コロナ×こども本部のホームページで公開している音声付き講演資料「コロナ禍におけるこどもたちの心とからだ」の中で詳しく解説していますので，ぜひご活用ください。

周囲がいつでも支えられる準備をしておくことに加えて，こどもたち自身がもっている力を伸ばすことも同じくらい重要です。第５回調査では，こどもたち自身が実践しているストレス対処法について教えてもらいました。「だれかに話す・聞いてもらう」「書き出す」「寝る・ふとんにくるまる」「だきしめる・あまえる」「考えない」「食べる・料理をする」



など，こどもたちが編み出した方法にはおとなもハッとさせられます。寄せられたストレス対処方法をイラストとともに紹介した資料「こどもが考えた『気持ちを楽にする23のくふう』」もホームページでご覧いただけます。ストレス対処のレパートリーを増やすヒントになるはずです。

一方で，ストレスに影響を受けやすい特性を持つこどもや，大きなストレスを抱えたこどもの中には，セルフケアや家庭・学校などでのケアに加えて，医療機関での治療やケアが必要な場合もあります。「眠れない日が続く」「食事がとれないことが続く」「不安や恐怖感が強い」「いつもイライラしていて落ち着かない」「不登校や外に出られない状態が続く」「自分や人を傷つける」「死にたい・消えたいと思うときがある」などの状態にある場合には，受診してもらうように促し，こどもの心の診療をおこなう専門機関と連携してサポートすることを考慮してください。

３　こどもたちのニーズ

コロナ×こどもアンケートに寄せられるこどもたちのニーズの中で，「聴いてもらうこと」と「尊重されること」がとても多くなっています。第２回調査で「こどものことを決めるとき，おとなたちはこどもの気持ちや考えを，よく聞いていると思いますか？」という質問に対して，小学校低学年の15%，高学年の25%，中高生の42% が「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」と回答しました。

また，第５回調査で，コロナのせいで先生や大人への話しかけやすさ・相談しやすさが「とても減った」または「すこし減った」と回答したこどもは約半数にのぼりました。

自由記述の中では次のような声が挙がっています。「子どもも学校のコロナ対策に参加したい。決められたことしかしないのはおかしい。」（中２男子），「大人だけでいろいろ議論しないで，子どもの気持ちも聞いてください。」（小５女子），「お母さんに座ってちゃんと聞いてって（言いたい）。」（高１男子）「話を聞いてくれる人は，からかったりうざがったりしないでちゃんと聞いてほしい。」（中３女子），「話を最後まで聞いてくれる時間がほしい。僕たちの意見もたくさんある。」（小３男子）

コロナ禍で様々な制限を受ける中で，先生方の学校では，こどもたちが思ったこと考えたことを十分に表出する機会が保証されていたでしょうか。表出された気持ちや考えは尊重されていたでしょうか。改めてふり返り，もし改善できるところがあれば今日から工夫していただけたらと思います。

４　こどもと関わるおとなのメンタルヘルス

こどもの生活と健康を守るうえで，こどもと関わるおとなのメンタルヘルスも大切です。アンケートでは，約６割の保護者が「こころに何らかの負担がある状態」で，「深刻なこころの状態のおそれがある」保護者は２割程度にのぼっています。また，保護者自身のセルフケア・ストレス対処を「いつも」あるいは「たいてい」大事にしているのは３人に１人程度にとどまっており，「全く（大事にしてい）ない」保護者は１割以上もいました。保護者の精神的な健康が損なわれると，こどもへの虐待行為や，こどものメンタルヘルス低下につながりかねません。コロナの影響が長期化する中，いわゆるハイリスクの家庭だけでなく，多くの家庭にひずみが生じているものと考えられます。学校の先生方からの声かけや情報共有は，特に孤立しがちな家庭にとっては大きな救いの手になるはずです。

また，学校の先生方・教育関係者の方々のメンタルヘルス評価，ストレスケアも忘れてはなりません。平時から多大な責任と業務を担う先生方は，コロナ禍で様々な対策や対応を求められる中で，頑張りすぎたりストレスを抱えたりしていても自分では気づかなくなっている場合があります。先生方が自分やお互いをケアすることは，こどもたちを守るためにもとても大切です。上で紹介した講演資料では，おとなが自分をいたわるためのヒントも掲載しています。ぜひご参考にしていただければと思います。

５　おわりに

コロナ×こどもアンケートの調査結果や関連情報は，国立成育医療研究センターのホームページで公開しています（右の QR コードよりアクセス）。今回紙面で紹介したデータ以外にもたくさんの情報を公開しています。特に，自由記載形式でこどもたちから寄せられた声には，ハッとさせられるものがたくさんあります。こどもたちに関わるすべてのおとなのみなさまに，ぜひご一読いただきたい内容です。

また，LINE 公式アカウント「コロナ×こども本部」では，最新のアンケート結果や関連情報を随時お届けしています。どなたでも無料でご利用いただけますので，この機会にぜひ LINE で「@codomo」と検索して友だち登録してみてください（ホームページから QR コード等でも登録できます）。過去の配信内容もご覧いただけます。

今般のコロナ流行は，こどもにもおとなにも，様々な新しい問題を突き付けています。一方で，これまでも潜在的にあったものがコロナをきっかけに顕在化してきた問題も，少なからずあるように感じます。こどもたちが健やかに成長できるために何が必要なのか，私たちおとなにできることは何か，こどもとおとなが一緒に考え，ともに成長していきたいものです。

日々こどもたちを支えてくださっている教職員の先生方に改めて感謝の意を表します。

先生方も心身のご健康を大切に，くれぐれもよろしくお願いいたします。

■プロフィール
半谷まゆみ（はんがい まゆみ）
2010年東京大学医学部卒，小児科専門医・指導医，公衆衛生学修士。2017年より国立成育医療研究センター社会医学研究部研究員。2020年４月に有志医師・研究者らとともにコロナ×こども本部を立ち上げ，活動中。２児の母。

＜特別インタビュー＞

「障がいがあっても自由に走れる社会を」義足エンジニア・遠藤 謙さん

岡　邦行
（ルポライター）

1978年７月10日，静岡県沼津市生まれ。43歳を迎えた遠藤謙さんは，小学生時代，プラモデルなどに興味を抱き，プラモデル店主催のレースにチューンナップしたミニ四駆で参加し，優勝したこともある。

早い話が，遠藤さんは小学校高学年の頃からものづくりが好きだったのだ。高３のときに慶應大学理工学部への推薦入試の際に提出したエッセイには，「ものをつくるだけでなく，人間の安全や機能を高め，人間を豊かにするようなものづくりをしたい……」と綴ったという。

1　バスケットマンから義足エンジニアの道へ

そして，中学時代の遠藤さんは，バスケットボールに夢中になった。中２の夏，1992年に開催されたバルセロナ・オリンピックの際は，金メダルを難なく獲得したアメリカチーム，プロバスケットのNBA のスーパースターで編成されたドリームチームをテレビ観戦。そのプレーに固唾をのみ，完全に魅了されてしまった。

「マイケル・ジョーダン，マジック・ジョンソン，デビット・ロビンソン，ラリー・バード……。今も思いだすことができますし，もう彼らの人間離れした迫力あるプレーに驚いてしまった。

もちろん，高校（沼津東）入学後もバスケットを続けましたが，チームとしては県大会で緒戦突破すれば満足する，強くも弱くもないチーム。ぼくが３年のときは，何度も全国制覇を果たしている秋田県の能代工１年に田臥勇太がいて，彼のプレーが印象に残っている。たしか３年間公式戦負け知らず。田臥は後に日本人初の NBA 選手になっていますね」

懐かしむように遠い日を振り返る遠藤さん。実はものづくりの好きなバスケットボールの選手だったことが，義足エンジニアの道を歩む大いなる契機となった。

先に述べたように高校卒業後は推薦入試で慶應大学に入学をし，さらに大学院でロボット開発に着手していた2004年だったという。高校時代のバスケットボール部でともに汗を流した後輩が骨肉腫を患い，足の切断を余儀なくされたのだ。

「後輩の彼に会うと『骨肉腫で足を切るかもしれない』と……。その言葉がきっかけとなって義足について考えてみようと思った。

とにかく，彼の話を聞いてからは義足についていろんなことを調べた。その年の夏に宮城県仙台市で開かれた学会に出席したら，MIT（マサチューセッツ工科大学）の両脚義足の教授が，義足の研究・開発に取り組んでいるという情報を得ることができた。そこで MIT 留学を考え，急いで留学の準備に取りかかったわけですね」

そう語る遠藤さんに私は尋ねた。

「思ったらすぐに行動にでる性格なんですね？」

遠藤 謙（えんどう けん）

2001年慶應義塾大学機械工学科卒業。2003年同大学大学院修士課程修了。2005年よりマサチューセッツ工科大学で学び，2012年博士取得。現在，ソニーコンピュータサイエンス研究所にて，ロボット技術を用いた身体能力の拡張に関する研究に携わる。2014年には，競技用義足の開発から販売までを行う株式会社 Xiborg を仲間と起業し，代表取締役に就任。MIT テクノロジーレビュー主催の世界的なアワード「Innovators Under 35」を2012年に受賞。

「いや，実際のぼくは，石橋を叩いて壊してしまうほどの慎重派です……」

苦笑しつつ遠藤さんは言い，視線を宙に浮かせて軽く頷いた。

こうして2005年に渡米し，MIT 留学を果たした遠藤さんは，両脚義足のヒュー・ハー教授に師事。電気情報工学の博士候補生としてバイオメカニクス・ロボット義足の研究に取り組んだ。ヒュー・ハー教授の片腕的存在の１人として研究を重ね，義足装着者から「自分の足で歩いている感じだ」といった高い評価を得ている。一方，東南アジアの途上国に出向くなど貧困層のこどもたちへの義足の提供や普及に情熱を燃やした。

「MIT のあるマサチューセッツ州のボストンは，どちらかというと学生が多い若者の町。なおかつぼくが師事したヒュー・ハー教授は，あまり喋らないシャイな人だったが，両脚義足のために周りの人たちは障がい者に対して理解があった。たとえば，階段を上がるときは自然に手を差し伸べる。そういった調子でみんながサポートする。

それにボストン東スクールという自閉症のこどもたちが通う学校があり，ぼくは何度か訪ねているしね。そういった体験により，自然と障がい者たちと向き合うことができたと思う」

２　為末大と Xiborg を設立して代表に就任

2012年に帰国した遠藤さんは，ソニーコンピュータサイエンス研究所の研究員に就任し，同年９月に元陸上競技選手でオリンピアンの為末大さんと出会う。そのことが一気に義足エンジニアとして拍車をかけることになる。

「為末さんは，オリンピアンとして世界で結果を残しているし，義足について話し合ったら考え方がほぼ同じで，義足で走るのも健常者が走るのも同じだという考え方。もちろん，義足で走るメリットとデメリットはありますが，ぼくら科学と向き合っているエンジニアは，研究だけだと机上の空論になる恐れもありますからね。そこで現場を熟知しているアスリートの為末さんたちとコラボレーションしたらいいと，そう考えたわけです」

そう説明する遠藤さんは，２年後の2014年５月だった。為末さんたちと株式会社 Xiborg（サイボーグ）を設立して代表に就任。陸上競技短距離のパラリンピアンの佐藤圭太さんを始め春日純さん，池田樹生さんの協力を得て競技用義足の Genesis（ジェネシス）を完成させて販売し，2016年リオデジャネイロ・パラリンピックに陸上競技４×100㍍リレーに出場した佐藤圭太さんが銅メダリストになったのだ。当然のごとく Xiborg 製の Genesis は，世界のアスリートから注目された。

当時を遠藤さんが語る。

「初めてパラリンピックという最高峰の舞台で，それもぼくたちが開発した競技用義足で走った佐藤さんがメダリストになり，注目を浴びた。もうひと言で嬉しい。正直『やったあ！』と，そのときは思った。

でも，いつまでも喜んではいられない。ぼく自身はいつも疑問を感じてしまうんですね。たとえば，『他社の義足を使用していればもっと速く走れたかもしれない』なんて思う。エンジニアの性（さが）かもしれない。常に『さらに研究を重ねていいものを開発し，提供したい』と考えてしまう」

ちなみに100㍍と200㍍のアジア記録と日本記録を樹立している佐藤圭太さんは Genesis を使用し，2017年の世界パラ陸上競技選手権大会の４×100㍍リレーでも銅メダルを獲得している。

トップアスリート向けのスポーツ用義足「Xiborg Genesis」（現在は後継モデルの「Xiborg *v*（ニュー）」）

トップアスリート向けのスポーツ用義足「Xiborg *v*（ニュー）」

3 ギソクの図書館で，本を借りるように気軽にレンタルできる

病気や事故などで障がい者になった場合，日常生活で使用する車いすや義足類は医療保険が適用される。ところが，競技用に設計された車いすや「ブレード」と呼ばれる競技用義足は，カーボン製の板バネの部分だけでも20万円から60万円ほどするという。高額なのは，保険適用外になっているためだ。

そこで立ち上がったのが遠藤さんたちスタッフ，加えて義肢装具士の人たちも賛同。2017年にクラウドファンディングで631人から1753万3000円の支援を受け，同年10月に東京・江東区の新豊洲 Brillia ランニングスタジアム内で競技用義足を貸しだし，気軽に装着できる「ギソクの図書館」をお披露目したのだ。

「NPO 法人のギソクの図書館については，以前から佐藤圭太さんが提唱していた。パラリンピアンの彼は，アスリートとして活躍するだけでなく，１人でもいいから一般の義足使用の人たちにも走る楽しみを味わって欲しい。同じ人間なんだから健常者のように思いきりスポーツで汗を流して欲しいと願っていた。彼が言うには『バネのように弾む競技用義足は慣れないと不安定だが，練習すれば地面を蹴って風を切れます』とね。そういった環境を早くつくりたいと言っていた」

そう経緯を語る遠藤さんは，一拍置いてから続けた。

「たとえば，ギソクの図書館が提供した競技用義足でこどもが運動会で走っている。そんな姿を見ることはもちろん嬉しい。でも，考えてみれば，今まで走れなかったことが現実だったんだな，と痛感してしまう。足を失っただけで走れない。佐藤さんが言うように走って風を切ることができない。そんな環境を先ずは無くすことですね。

とにかく，ギソクの図書館を設立したことは，大きな１歩だったけど，課題もあるし，足りない部分もある。たとえば，こどもが走りたいと思っても，ギソクの図書館に行かないと利用できない。月に１回ランニングクリニックを実施しても，遠方の人が参加するのは大変だと思う。つまり，走りたいときに，いつでも走れるわけではない。でも，そんな環境を変えなければならない」

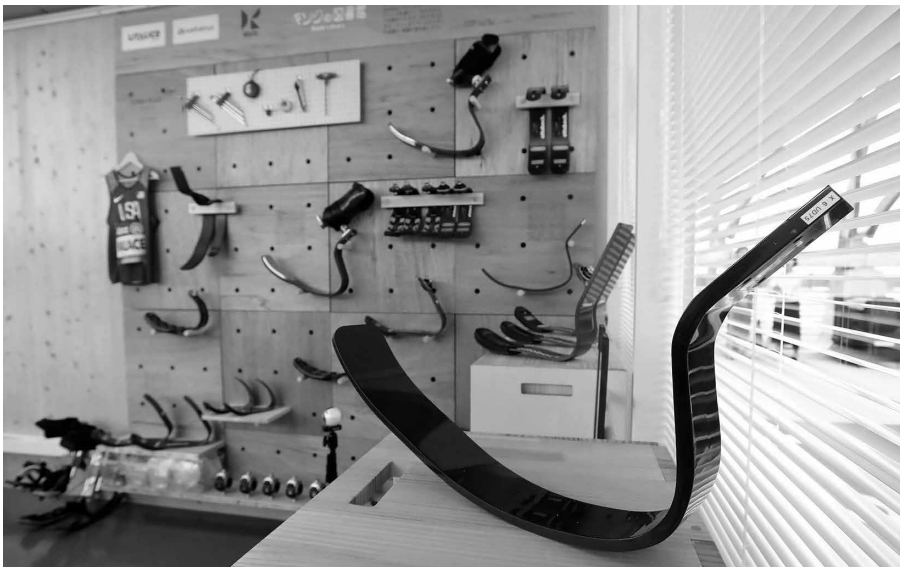
そして，遠藤さんは次のような話を伝えてくれた。

「ある日，オーストラリア人の女の子だったけど，ギソクの図書館にやってきた。彼女は競技用の義足を持参していたけど，ぼくたちが貸しだしている日本製の競技用義足で走りたいとね。そこでいろいろと話をしたら，彼女が生まれ育ったオーストラリアのクイーンズランド州は，無償でスポーツ用の義足を提供していると言う。

興味深いのは，日本と違って，スポーツ用の義足の費用を公費で負担している点。その背景には，スポーツが予防医学に役立つという考え方がある。つまり，スポーツは人々の健康に貢献すること，そして，障がい者も幼少年期から競技用義足を装着し，スポーツに親しむことで，心身の健康が向上すること，それがひいては社会全体の医療費を抑制することが期待できる，ということでね。オーストラリアは，スポーツを予防医学に活用する政策・制度も進んでいる……」

4 誰もが自由に走れる社会を目指すプロジェクト「Blade for All」

以上のようなジレンマからだろう。遠藤さんたちスタッフは，さらに昨年の2020年だ。コロナ禍にもめげずに義足ユーザー誰もが自由に走れる社会を目指すプロジェクト「Blade for All」を発足させたのだ。



ギソクの図書館内に並べられたレンタル用の競技用義足。（2017年10月，朝日新聞社提供）

「ぼくが研究員として義足を研究・開発しているソニーコンピュータサイエンス研究所。アスリートに競技用義足を提供し，走る環境をつくる Xiborg。そして，誰もが走れるように競技用義足を貸しだすギソクの図書館が三位一体となって積極的に活動し，加えて企業や自治体や障がい者スポーツ団体などの協力を得る。義足ユーザーの誰もが走れる環境づくりに取り組むプロジェクトです」

プロジェクトに参加する前出のパラリンピアンの佐藤圭太さんに関する，こんないい話がある。

都内の中学生・M さんが２年前，小児がんの１種を右脚に発症。手術で切断して義足の生活を送ることになった。だが，幼い頃から身体を動かすことが大好きなわが子を思う父親は，同じ病気で義足になった佐藤さんの存在を知ってツイッターで交流。佐藤さんの前で M さんは初めて競技用義足を装着。ゆっくりと走り，風を切ったのだ。佐藤さんは言った。

「日常用の義足で走れと言われたら，ぼくは走るのが嫌いになっていた……」

また，静岡県の障害者スポーツ協会は昨年９月，県出身の佐藤さんたちアスリートが指導する講習会を開催。義足ランナー誕生のきっかけとなった。

現在のプロジェクトは技術や資金，場所の提供など地域企業の協力を募っている。一方，走りやすいように設計されたブレードを使用する義足ユーザーからは，毎月１回アンケートを取り，精神面や身体に関する変化を細部にわたって精査。さらなる研究・開発に取り組み，近い将来は10万円を切る安いスポーツ用義足を完成させたいという。

遠藤さんは力説する。

「まだまだ課題はいっぱいあります。競技用義足を装着するには，義肢装具士さんのサポートが必要。身近に義肢装具士さんがいればベターなんですが，講習会を各地で開いたりね。たとえば，保健体育の先生ができればいいんですが……。

調べてみると日本には，下肢切断のこどもが900人ほどいると言われていて，単純に計算すると都道府県に約20人から30人がいる。つまり，各都道府県が200万円から300万円の予算を計上してくれれば，競技用義足を希望するこどもたちに提供できる。たしかに昔の日本は，障がい者自身が外にでることを躊躇っていたし，周りの人も見て見ぬ振りをしていた。でも，パラリンピックを頂点とする障がい者スポーツの普及もあってか，日本も障がい者が社会にでるようになった。

ぼくが MIT に留学しているときに，南アフリカの両脚義足の陸上競技アスリートのオスカー・ピストリウスが大学にやってきた。競技用義足の研究・開発のためにね。彼は2012年にロンドンで開催されたオリンピックとパラリンピックの両大会に出場した唯一のアスリートで，誰もが感動した。あの感動を忘れてはいけないと思う……」

遠藤さんの言葉に私は頷いた。

＊

コロナ禍の中，最悪の状況である無観客で2020東京オリンピックとパラリンピックは開催された。「共生社会の実現」を理念に掲げるパラリンピックは，その責務を全うしたのだろうか。

パラリンピックの父と称されるルートヴィヒ・グットマンは言った。

「失ったものは数えるな。残されたものを最大限に生かせ」

そして，生涯を盲女性の社会進出に身を捧げた斎藤百合の言葉を思いだす。

「その国の弱者がどう扱われているかによって，その国の文化水準を測ることができる」――。

■プロフィール
岡 邦行（おか くにゆき）
1949年，福島県南相馬市生まれ。第３回報知ドキュメント大賞受賞。スポーツに関わる人々の姿を追ったルポを月刊誌『体育科教育』で連載中。著書に『中村裕　東京パラリンピックをつくった男』『大島鎌吉の東京オリンピック』など。

体育・保健体育ニュース 2021年 No.3（通算40号）
2021年９月20日発行

●編集　大修館書店編集部
●発行所　株式会社　大修館書店
〒113-8541　東京都文京区湯島2-1-1
TEL 03-3868-2298（編集部）／ FAX 03-3868-2645
［出版情報］ https://www.taishukan.co.jp
●印刷・製本　広研印刷株式会社